



## 第3回 未来につなぐ子育て支援セミナー

# 精神的に 誰もが安心・安全な家庭を築く!

— 子育て現場が直面する「焦眉の課題」解決に向けて —

本会代表 原田 正文

本年9月19日に下記のとおり、第3回「未来につなぐ子育て支援セミナー」を開催します。このセミナーの開催は2年ぶりになります。

### 第3回「未来につなぐ子育て支援セミナー」 精神的に 誰もが安心・安全な家庭を築く!

2026年9月19日(土) 13:30~16:30

Zoomオンライン(オンデマンド配信予定)



#### 1部 講演

「なぜ夫婦は“すれ違う”のか

～脳科学から考える夫婦の問題、子育ての問題～

講師:黒川 伊保子氏

#### 2部 報告

「BP1プログラム効果測定アンケート全国調査」

発表:原田 大輔

## セミナーの目的

今回のセミナーの目的の一つは、全国の皆様にご協力いただき、昨年1月より実施してきました「BP1プログラム効果測定アンケート全国調査」の結果報告です。調査結果については、現在集計中です。ご期待ください。

2つ目の目的は、表題に挙げました「精神的に 誰もが安心・安全な家庭を築く!」という、現代日本の子育て現場が直面している課題を解決するために、脳科学という新しい視点から光を当てることです。そして、この新しい視点を、子育て支援にかかわる多くの方々と共有することです。

## 本会の問題意識

今回のセミナーを開催するにあたっての本会の問題意識は、親子の絆づくりプログラム(BPプログラム)の参加者である母親たちの訴えに基づいています。特に夫への不満が多く聞かれます。例えば、

- 子どもがギャン泣きしても、平気で寝ている。
- 育休で家にいるが、あまり手伝わず、自分の好きなことをしている。
- 手伝うと言って食器洗いや洗濯物干し等をしてくれるが、雑なので、2度手間。
- 私が外出し、家で子どもを見てもらっても「ウンチした、すぐ帰ってきてほしい」という。母親たちの訴えはもっともなことです。しかし

父親が母親の期待に応えるのはなかなか難しい状況です。このような状況を何とかしたいという思いが、今回のセミナーの開催趣旨です。

## 時代の変化

つい100年くらい前、昭和の初めの頃は、地域のみんが協力し合わないと生きていけなかったため、地域社会が機能していました。お産ともなれば、産婆さんが来て、近所の女性たちが総出でお産にも立ち会い、産後の赤ちゃんの世話も周囲のおばさんたちが引き受けていました。男の出る幕はほとんどなかったと思います。

ところが現代では、自分の子どもを産んで初めて赤ちゃんに触れるという母親が、誰の助けもなくひとり赤ちゃんと世話をしないといけないという状況が広がっています。相談できる相手は夫しかいません。これはもともと無理な環境です。結果として、危機的状況が広がっているように思います。

## 壮絶な体験を超えてきた母親たち

私は研修医の時、産婦人科で3か月研修をしました。陣痛室に張り付いて、出産現場にも立ち会いました。母親たちは、陣痛・出産という壮絶な体験をしたにも拘わらず、出産後は何もなかったかのように赤ちゃんを抱いています。女性というのはすごいな、と感心したことを憶えています。

BP1プログラムに参加する母親たちは、つい数か月前に初めての出産という壮絶な体験をしたにもかかわらず、その後すぐに赤ちゃんと一生懸命に向き合っています。「この子の命を守るのか」という緊張と不安に押しつぶされそうになりながら、毎日を過ごしています。

## 出発点で遅れる男たち

一方、男はというと、「無事に生まれてよかったな」という安堵感がありますが、それ以上の感慨を持つことは、生物体としてなかなかむつかしいのです。母親は出産時点で、すでに約9か月、赤ちゃんとの濃密な時間を過ごしています。出産した時点ですでに、母親は赤ちゃんに対する愛着をしっかりと持っています。一方父親は、赤ちゃんとの愛着形成はまだほとんどできていません。そこに母親と父親の出発点での大きな違いがあります。

## 期待に応えられない男たち

核家族化が進んだ現在、育児を手伝ってくれる人として、夫しかない。しかし、夫は期待するほど頼りにはならないのです。結果、ワンオペ育児にならざるを得ず、母親のイライラはたまる一方です。

社会の風潮は「男女平等」です。夫も当然育児に主体的にかかわることを要求されます。しかし脳科学的にみると、夫が母親の期待に応えることは無理な面があります。夫の発する言葉や態度は、母親の気持ちを逆なでし、母親には感情的な不満・イライラがたまります。一時期、「夕暮れ族(?)」という言葉がマスコミでも話題になりました。家に帰るのが怖くて、近くで時間をつぶしている夫のことです。現在もそういう夫は多いのではないのでしょうか。

## 家庭の雰囲気敏感にキャッチする赤ちゃん

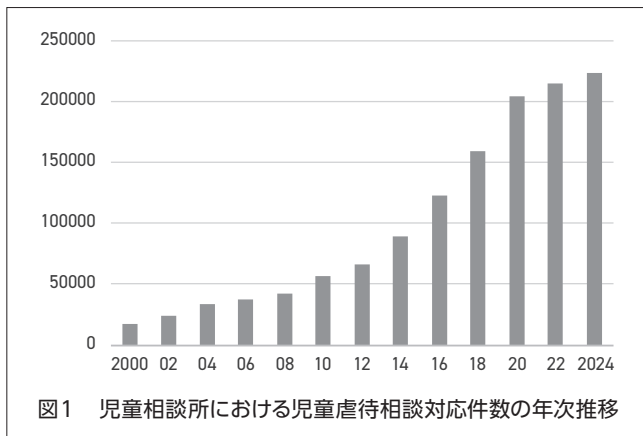
子どもが生まれるまではそれなりに仲良く暮らしていたのに、子どもが生まれた途端、夫婦の雰囲気は一変します。

子どもは、胎児の頃でさえ、母親や父親など周囲の雰囲気を敏感にキャッチできると言われています。赤ちゃんは当然、母親や父親、家庭の雰囲気を敏感にキャッチしながら生きています。このゼロ歳時期の体験が、将来の対人関係に大きな影響を与えるとされています。そのため、本会では「精神的に誰もが安心・安全な家庭を築く!」という課題を、実現すべき焦眉の課題としてとらえています。

## 子ども虐待の現状から

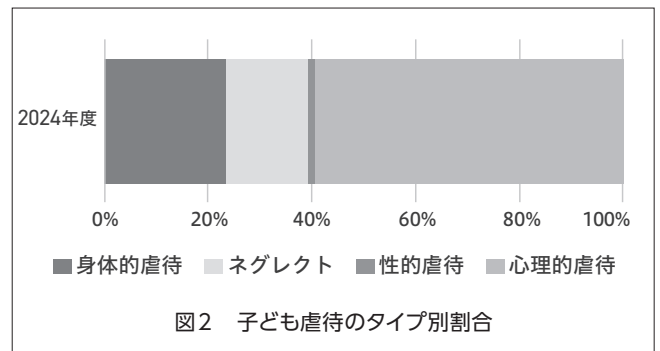
ここで視点を変えて、急増する「子ども虐待」のデータから、「精神的に誰もが安心・安全な家庭を築く!」という課題を考えてみます。

図1に「児童相談所における児童虐待相談対応件数」の年次推移を示します。図1からわかりますように、児童相談所での相談対応事例は、2000年度には約1.8万件だったものが、年々急増し、2024年度は22.3万件にもなっています。恐ろしいほどの増加です。



## 警察が介入せざるを得ない夫婦げんかの急増

図2に、子ども虐待のタイプ別割合を示します。「心理的虐待」がここ数年約60%を占めています。この「心理的虐待」件数のほとんどは、夫婦間のDVです。警察が介入した際に、その家庭にいた子どもが「心理的虐待」として計上されます。警察からの通報が、通報先としては、約半数を占めています。これらの事例は、子ども虐待に入れるべきではないのでは、という専門家もいますが、見方を変えますと、警察が介入せざるを得ないほどの「夫婦喧嘩」が頻発しているということです。



「夫婦喧嘩」というものは当事者でないとわからないものです。いや、当事者もわかっていないかもしれません。警察が介入しないといけないところまでヒートアップしてしまった事例が、「心理的虐待」として計上されますが、このような事態は、現在の子育て現場ではどの家庭にも起こりえることのように思います。

しかし、そういう場を子どもが見ながら育つことは、その子の精神発達に明らかに悪いです。BPが常に伝えている『「私は守られている。愛されている。安全で安心できる」と子どもが思えるような環境を作りましょう』というような家庭環境とは、真逆の環境です。

## 脳科学から考える夫婦の問題

BP2、BP3プログラムでは、第4回で「私のイライラ」というテーマを取り上げます。たいへん期待して参加されますし、大満足して帰っていただいているようです。

現代日本の子育て現場では、このイライラを扱い間違えると、どの家庭でも警察が臨場するようなDV案件になる可能性を秘めています。

そこで、本セミナーでは、脳科学という視点から子育て中の夫婦の問題に新しい光を当てたいと思います。

講師は、NHKラジオ朝の番組「ふんわり」で、金曜日のパーソナリティを長年担当しておられる黒川伊保子先生に登場してもらいます。私の押しです。ぜひ、ご参加ください。